『敵討身代利名号』―翻刻と解題―（下）

*中尾和昇

要旨

前稿に引き続き、馬琴合巻『敵討身代利名号』（文化五年［一八〇八］刊）の翻刻をおこない、簡単な解説を付した。

本作は、親鸞上人の十字名号による「身替り」の趣向をテーマとする仇討譚で、いわゆる神仏霊験譚に位置づけられるが、十字名号をめぐっては、超越者による予言とその実現という、いわゆる「読本的枠組」に類するものが設けられている。馬琴の読本著述における蓄積が合巻にも波及していることが窺え、興味深い現象と言える。詳細は、拙稿「馬琴小説における「身替り」―神仏霊験譚をめぐって―」（『読本研究新集』12、二〇二一年）を参照されたい。

キーワード：曲亭馬琴、合巻、演劇、身替り

［16オ］

是より末は、此草紙の後編なり。前編三冊売り出しおき申候。前後六冊にて全本なり。　馬琴著 印

さても藤坂実太郎は、僕どもには身の暇をとらせ、家をも人に与へ、「本望を遂げずんば、生きて再び鎌倉へ帰らじ」と誓ひを立て、わざと人目を忍ぶために、回国の修行者に出立ち、「亡き父母の菩提はもちろん、たゞ速やかに敵にめぐり逢はし給へ」とて、三世の諸仏の冥助を仰ぎ、すでになごや村を出立せしが、「鶴岡の八幡宮は、氏の御神にてましませば、これをも頼み奉らん」とて、その夜はかの社に参籠し、夜すがら祈念をこらしけり。

〽さて〳〵我が身程、親子の縁の薄い者はあるまい。これも前世の悪業ならば、救はせ給へ弥陀如来。

〽よしや忌服の穢れありとも、まことを照らすお御神の、我を

写真1　16オ

2021年10月4日受理　＊文学部准教授

ば許し給ふべし。本地は大日弥陀如来、正八幡の宝前に、通夜して頼み参らすべし。南無阿弥陀仏〳〵。

［16ウ17オ］

実太郎はその夜、鶴岡の社前に通夜せしが、さすがに忌服の穢れを憚り、拝殿のこなた、鳥居の傍らに座を占め、夜もすがら念仏してありけるに、その夜もすでに丑三つと思しき頃、段葛の方より、年の頃二十歳余りの美女、頭に鉄輪を戴きて、三本の蝋燭をともし、身に綾の白無垢を着て、髪を長く振り乱し、弓手には太き金釘を握り持ち、馬手には金槌を引提げて、歯一つある高足駄を履き、神木の杉に歩み寄りて、すでに釘を打たんとす。実太郎つくゞ〳〵見て、「あな浅まし。これは人を呪ふ丑の時参りなるべし。我いかにもして、この女を教訓し、悪念を翻させばや」と思ひしかば、づか〳〵と走り出て、たゞ今振り上ぐる金槌を、しかと捉へて動かせねば、女はじろりと振り返る、眼さし凄まじく、「汝何者なれば、我が念願の妨げする。そこ退けやつ」と振り払ふを、実太郎は止めたる手を離さず、静かに女人の罪深き事を説き示し、又仏の慈悲莫大なるよしを物語り、「早く憎し妬ましと思ふ雲霧を払ひて、真如の月に我が胸を照らし給はゞ、生きては煩悩の絆を断ち、死しては地獄の苦しみを免るべし。ゆめ〳〵かゝるわざをは思ひ止まり給へ」と教訓せしかば、女もやゝ納得して、感涙を止めかね、釘も金槌も御手洗に投げ捨てゝ、実太郎に一礼し、元の道へ帰ると思へば、姿は消えて見えさりけり。

〳〵この丑の時参りの事、末の四丁目に見えたり。

〳〵止めればそなたも我が身の仇。打つ金槌の八つ当たり、怪我して後悔しようがや。

〳〵見るさへ丑の時参り。瞋恚の角を打ち折つて、まことの道へ入り給へ。

応永元年　奉納御宝（前）　八月十五日

大願成就

写真2　16ウ・17オ

［17ウ18オ］

実太郎は、鶴岡にて丑の時参りを教訓し、「よき功徳したり」と思ひて、それより霊地〳〵を残りなく巡拝し、ついに都に上りて、黒谷へ参詣

せし日、年の頃五十余りの侍、これも参詣して帰るとて、はしなく実太郎に行き合ひしが、かの侍、実太郎が袖をひかへ、「卒爾ながら申すべき事あり。それがしは深草の郷侍にて、須藤順左衛門と呼ばるゝ者なり。しかるに、一人娘なる貌美葉といふ者を、過ぎつる頃、鎌倉の管領氏兼朝臣の奥方へ、宮仕へに出せしに、いかなる事にや、物狂はしくなりて、身の暇を給はり、家に立ち帰りて養生せしに、はからずも法然上人の冥助によつて、病気本快せしゆゑに、信心肝に銘じ、かく日毎に法然上人の旧巣に参詣し、「なほ願はくは、しかるべき婿を授け給へ」と願ひしに、ゆふべありがたき示現あつて、「汝明日、黒谷のほとりにて行き合ふ者に、婚縁を約すべし。汝運命拙しといへども、娘は行末栄ふべし」と示し給へり。しかれば、御身は我が婿なり」と言ふ。

〈かくまでに心を尽くして、国々を経巡れとも、敵の手かゝりもないといふは、よく〳〵武運に尽き果てたか。はて是非に及ばぬ。〈南無西方阿弥陀如来ならびに法然上人、たとへこの身は運拙くとも、娘貌美葉が夫とすべきよしある者を導き給へ。南無阿弥陀仏〳〵。

［18ウ19オ］

その時、実太郎大に驚き、「我は身に大事ある者にて、妻などを持つべき者にあらず。こは人違へならん」と言へば、順左衛門懐中より一巻を取り出し、「疑ひ給はゞ、この名号を拝見あるべし。此名号を得たりしより、娘が乱心本復し、「そこを婿にせよ」といふ示現さへ蒙りたり。さら〳〵人違ひにあらず」とて、かの一巻を恭しくおし戴き、さら〳〵と開くを見れば、父が打たれたる時に奪はれたる十字の名号にてありければ、実太郎「すはや」と喜び、用意の仕込杖を抜きかけて、「親の敵逃かさじ」と詰めかくれば、順左衛門大に驚き、飛びすさつてその故を問ふに、実太郎は、その夜、提灯へ受け止めし手裏剣を取り出し、「この小柄は定めて覚へあるべし。我は鎌倉なごや村の郷侍、藤坂知右衛門が倅実太郎といふ者なり」と名乗りて、名号の来歴、父が打たれたる始末詳しく言ひ出て、「勝負せよ」と競ひかゝれば、順左衛門ます〳〵驚き、「我はまつたく人を殺せし覚へ

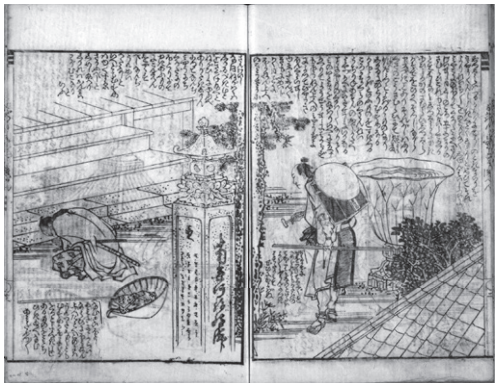

写真 3　17 ウ・18 オ

なし。その名号は、近頃我が里近くに来たり住む、武士の浪人蜘塚治部九郎といふ者より、金廿五両に買ひ受けたり。かの者、定めて貴殿の敵なるべし。それがし手引きいたすべければ、名乗り合ひて勝負を決し、本望を遂げての後は、我が婿になり給へ」と、委細の事訳を物語る。

〳〵敵の証拠はその名号。汝が打たるこの手裏剣、覚へないとは卑怯千万。さ、立ち上がつて勝負〴〵。

〳〵順左衛門子細を物語りて、名号を実太郎へ返す。

〳〵さては、この名号は貴殿の家の重宝よな。我はまつたく敵にあらず。貴殿の敵は別にあり。まづ〳〵せかずに一ト通り聞いて、疑ひ晴らし給へ。

大願成就

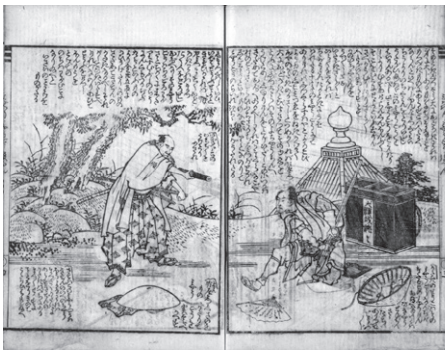

写真4　18ウ・19オ

［19ウ20オ］

かの蜘塚治部九郎は、過ぎつる頃、藤坂知右衛門を打つて名号を奪ひ取り、次の日、腰越を立ち退き、母親蜘手もろ共に、少しの縁を求め、山城国深草のこなた、一二の橋のほとりに仮住まひして、剣術の指南を生業とし、かすかなる暮らしにてありけるが、須藤順左衛門が娘貌美葉、狂乱して医療験なしと聞き及び、しきりに名号の奇特を言ひふらして、金子廿五両に売り与へしが、げにも霊験あやまたず、貌美葉が狂乱早速平癒せしかば、治部九郎は、「これみな我が陰なり」と恩に着せ、それより順左衛門が方へ行き交ひつゝ、いつしか貌美葉が容色に心地迷ひて、この家の婿にならんと下心あれは、順左衛門が留守を窺ひて忍び来たり、無体に手に入れんとて口説けども、貌美葉年若けれど、心正しき女なれば、得心せず、いつもつれなくもてなしぬ。

〳〵淫らな事さしやんすと、父様に告ぐるぞへ。

〳〵そこ放さんせぬか、ふさ〳〵しい。

〳〵これ〳〵君よ、そもじの病気のよくなつたは、この鼻様がお陰だによ。そう気強くはせぬものだ。これ、拝むといへば拝むわいなあ。

下女云〳〵治部九郎さん、又悪洒落だの。わつちやあおまんまを炊きかけてゐるけれど、貌美葉様があんまり大きな声をなさるから見に来やした。馬鹿らしい。

［20ウ］

順左衛門は、もとより心正しく情ある者なりしかば、実太郎を同道して、我が家へ帰る道すがら、つく〴〵と思ふやう、「事の様子を推量するに、治部九郎は実太郎が親の敵に疑ひなし。しかれども、彼も武士のはてなるに、我一言もこれを告げず、手引きして打たせんは情なし。まづ密かに事の由を告げ知らせて、尋常に勝負させばや」と思案し、やがて実太郎を我が家にいざなひ、娘貌美葉にも委細を物語り、何気なき体にもてなして、裏口より治部九郎が家に走り行き、一部始終を説き示して、「潔く打たれ給へ。これまでの誼に、母御の事は我ら貢ぐべし」と言ふ。

〽段々のお心入れ、お礼申さうやうもなし。かく証拠あらはるゝうへは、陳ずるに言葉もあらず。運尽きて打たれなば、母の身の上頼み存ずる。

〽あつはれ〳〵さすがは武士じや。母御の事は気遣ひあるな。我ら飲み込んでおり申す。

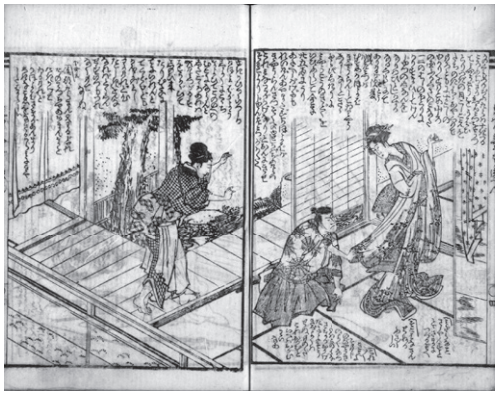

写真5　19ウ・20オ

写真6　20ウ

［21オ］

治部九郎は、順左衛門が説き示す事をしほ〳〵と聞きて、納得の体にもてなし、その油断を見すまして、たちまちにはたと突き倒し、起こしも立てず飛びかゝつて、胸元を刺し徹せば、順左衛門は手足をもが

き、「無念〳〵」と言ふ声を、最期の一句に事切れたり。この折しも、治部九郎が母蜘手婆々は、伏見の里へ行きて有り合はさねば、治部九郎、事の様子を告ぐるに及ばず、一通の書き置きを残し止め、路用を懐に押し入れつゝ、何地ともなく逐電す。程なく蜘手立帰り、我が子の書き置きを見て大に驚き、取る物も取りあへず、道引違へて逃げ去りけり。

〳〵いらざるお世話、口から高野、飛んで火に入る夏の虫。うぬが命も根腐つたは。

〳〵大事を知つた老いほれめ、生けおいては後日の妨け。くたばれ〳〵。

〳〵ア、無念〳〵。

写真 7　21 オ

［21ウ22オ］

実太郎はかくとも知らず、貌美葉にはそこ〳〵に挨拶し、たゞ片時も早く治部九郎が家に至りて、勝負を決せんと急き立ち、しきりに順左衛門を訪ぬるに、何地へか行きたりけん、たちまち見へずなりしかば、深く疑ひ、貌美葉に案内させて、治部九郎が家に行きてみるに、無残やな、順左衛門は座敷の真中に切り倒され、朱に染みて死しゐたり。「これは」と驚く死骸の傍に、落ち散る一通を取り上げ見れば、治部九郎が母蜘手への書き置きにて、事の様子明らかに知れしかば、実太郎は足摺して、かつ怒りかつ悔やみ、「いまだ遠くは隔てじ」とて、東西を駆け巡りつゝ、敵を追ひとめんと焦りしかど、治部九郎親子の行方知れねば是非なく、立帰りて貌美葉に力を添へ、順左衛門が野辺送りをさせ、さて言ふやう、「治部九郎は、我が父一旦養子とせんと約して後、破談し給ひし事あれば、「かの者それを心に含みて、闇討ちにせし事よ」と思ひあたりしゆゑに、順左衛門殿を疑はず、かの人に打任せしをもつて、敵をとり逃がし、あまつさへ須藤氏を打たせし事、残念千万なり。とかくに心急くなれば、我は早まかるべし」とて、すぐに深草を立ち去りぬ。

〳〵蜘手婆々、裏道より逃げて行く。

〳〵とうぞ治部九郎に会いたいものだが。

実太郎言ふ〳〵順左衛門殿、よしなき義理立てして、その身を失へり。

さて死なしたり〳〵。

〳〵なう父様、浅ましいこのお姿。何とせう、悲しや〳〵。

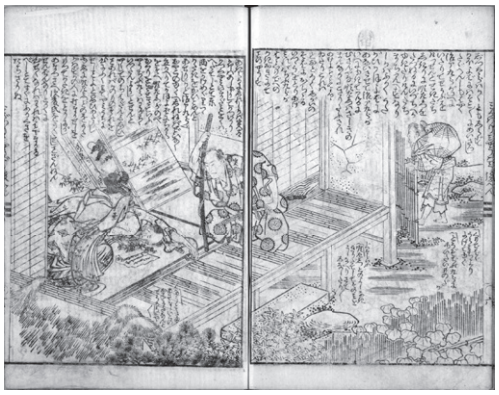

写真 8　21 ウ・22 オ

［22ウ23オ］

貌美葉つく〳〵と思ふやう、「我が父の治部九郎に打たれ給ひしも、まことは実太郎殿と潔く名乗り合はさせんとての為にて、我が身にも治部九郎は父の敵なり。しかれども、この身は女といひ、殊更かの人つけ狙ひ給へば、本望を遂ぐる事思ひもよらず。とかく実太郎殿に追ひ着いて、我が志を明かし、かの人と一つになりて、せめて一ト太刀なりとも恨みを晴らさん」と思ひつめ、人にも告げず身軽に出立ち、実太郎が跡を慕ひつゝ、遠近と尋ね巡りしかど、つひに行き合はず、なほ東路をさまよひて、相州三崎までまどひ来つ。ある日、深山辺にさしかゝりけるに、治部九郎が母蜘手婆々、これも近頃此辺にさまよひ来て、貌美葉を見かけ、「こはよき代物なり」と喜びて、出目介といふ悪者と心を合はし、貌美葉が路銀残りなく奪ひ取り、その上にて色里へ売り渡さんと目論みける。

〽うぬしぶとい女郎め。敵呼ばゝりおいてくれ。この路銀を取つたくらいでは、勘定が合はぬ。ぶち売つて隠居金にせにやあならぬ。

〽お袋まだるい〳〵。猿轡で息の根を止めさつしやい。

悪者出目介

〽そなたも言はゞ敵の片割れ。やみ〳〵と手籠めにならふか。

〽実太郎ははからずもこの所へ来かゝる。

○曲亭新作の読本外題を知る歌

〽為朝や頼豪椀久鳴神に三勝佐用媛お染薄雪

〽敵討坡隄庵に石枕二冊三冊これは中本

〽児手柏身代利名号小鍋丸歌舞伎伝介お妻八郎兵衛

〽敵討白鳥の関も自作なりすぐなに甚三は門人の作

庚申塔

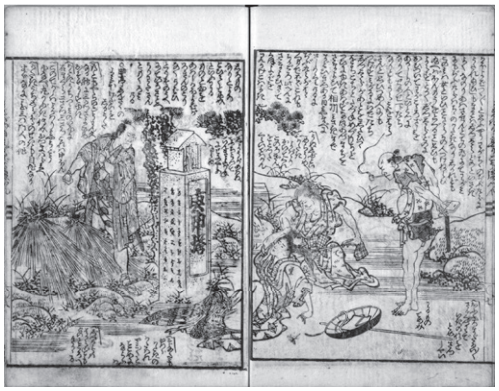

写真 9　22 ウ・23 オ

やうやくに心つき、「こは死なしたり、早まつたり。蜘手婆々を生けおいて、治部九郎が行方を責め問ふべかりしに、一時の怒りに任して殺せしこそ残念なれ。治部九郎も、定めて此辺に隠れおるべし。仕方あり」と頷きて、松の幹を削りつゝ、血潮をもつてさら〳〵と書き記し、ついに貌美葉を助け引て、三崎の旅宿へ赴きけり。

〳〵悪者共思ひ知つたか。

〳〵年は寄つても歯は達者だ。うぬ喰ひ殺すぞよ。

〳〵ア、肩先がひやりとした。コリヤ風邪でもひかねはよいが。ダア引。

〳〵よい所へ実太郎様、嬉しや〳〵。

［23ウ24オ］

かゝる所に藤坂実太郎は、敵治部九郎、相模路へ逃げ下りぬとほの聞きて、夜を日に継いでかの国へ赴き、はからずも蜘手婆々が悪者出目介とともに、貌美葉を手籠めにする所へ来かゝり、かくと見るより走りかゝつて、蜘手婆々をかい掴み、はるかにはたと投げつくる。ところを出目介息杖振り上げ、真向微塵と打つてかゝるを、肩先深く切り伏せたり。その隙に、蜘手婆々むつくと起きて、掴みかゝるをひらりとかはして、丁と切れば朱に染みつゝ、我武者の蜘手、実太郎が向かふ脛を、骨も砕くるばかりに喰ひつけば、実太郎ます〳〵怒り、たちまち刀を取り直し、首掻き切つて捨てゝけり。かくて後、実太郎は

写真 10　23 ウ・24 オ

［24ウ25オ］

かくて実太郎は、貌美葉を我が旅宿へ伴ひ帰り、「御身いかにしてこゝまで来給ひたる」と問ふに、貌美葉は思ひし事共を残りなく物語り、「何とぞ我が身ももろともに、敵を打たせ給へ」と頼むにぞ。実太郎大に驚き、「かゝる足弱を、いかでか介抱しながら、大望を遂げらるべき。よしなき事せし」と思へとも、さすがにその孝心も黙しかたく、我が旅宿へ留め置きしが、礼義を正しくして、一つ所におらず、少しも艶めいたる物語をせざりけり。しかるに、実太郎は蜘手婆々に喰ひつかれし傷、以ての外に痛み出し、ついに破傷風となつて腰立たず、「かくては、敵に巡り逢ふとも、その甲斐あらじ」と苛立ちければ、貌美葉も見るに悲しく、日毎に近き山寺へ参詣し、弥陀の利益を願ひけり。さてぞ、実太郎は病中の徒然に、居ながら引板・鳴子を引て、田の鳥を追ひしかば、近隣の百姓、大にこれを喜びけり。

〈実太郎は、かの名号を枕元なる柱に掛け置き、ます〳〵祈誓を凝らしぬ。

〈不思議な縁で世話になり、世話する事ではあるわいな。

〈どうぞ早う、傷の癒ゆるやうに進ぜたいものじや。

［25ウ］

さても、蜘塚治部九郎は過ぎつる頃、深草にて須藤順左衛門を打つて立ち退く時、事急なれば、母蜘手を待ち合はするに及ばず、親子別れ〳〵になつて東路をさまよひ、はからずも相模路なる三崎の浦へ来かゝりしに、ほとり近き山中の松をおし削り、「蜘塚治部九郎が母蜘手を打つたる者は、藤坂実太郎也。こゝより半道ばかり西の山里にあり。尋ね来つて勝負を決せよ」と書きつけてありしかば、初めて蜘手が打たれたるを知りて驚く。

〈蜘塚は、我が身親子の悪逆は思ひやらず、この書面を見て深く憤り、しばし睨まへて立つたりけり。

〈ムウ何々。

蜘塚治部九郎が母を討たる者は、藤坂実太郎也。訪ね来つて勝負を決すべし。こゝ〆半道西の山里にあり。

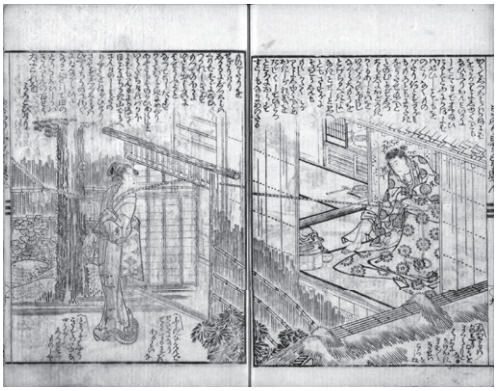

写真 11　24 ウ・25 オ

写真 12　25 ウ

［26オ］

実太郎は、足の傷ます〳〵痛み堪へがたく、貌美葉が山寺へ参詣せし留守居の徒然、たゞ独り身の行末を思ひ続け、「運拙くて、このまゝにやみ〳〵と世を去らば、亡き親人へ未来にて、言葉交はさんやうもなし。頼むは十方弥陀如来、病苦を助けたび給へ」と念ずる声ともろともに、へいでその苦痛助けんと、編笠かなぐり内に入る。へ汝は敵蜘塚よな。へおう治部九郎じや、見忘れはせまい。母の敵を打たんため、書付を見て訪ねて来た。さあ立ち上がつて勝負せよと、病につけこむ図々しさ。無念と焦る実太郎は、詮方もなく見えたりけり。

へなぜ立ち上がつて勝負せぬ。こは祈り遅れたか。もがいてももふ叶はぬ。首を洗つて刀を受けろさ。

へたとへ足腰立たずとも、思ふ念力岩をも徹す。やはそのまゝにおくべきか。

写真 13　26 オ

［26ウ27オ］

実太郎は心猛しといへども、足腰さへ立たざれは、いざりながらに打ちかくる、刀を払ふ治部九郎、肩先深く切り込んで、苦痛を見せるなぶり殺し。無念と焦る実太郎が、のたれまはれば鳴子の縄に、からまるまゝにくわら〳〵〳〵、無常の風の音添へて、あへなく息は絶へ果つる。とゞめの刀刺すがげに、貌美葉は山寺より、我が宿近く帰り来れば、常に異なる鳴子の音、胸に当たつて馳せ帰れば、実太郎はすでに打たれぬ。無念はいとゞいや増さる、か弱ぎ女の力にも、「父の敵逃がさじ」と、たしなむ一ト腰抜き放し、甲斐〳〵しくも打つてかゝるを、治部九郎せゝら笑ひ、片手であしらふ手練の切先、付け入り付け入るよすがもなく、ともに打たるゝ貌美葉が、数箇所の手傷に身は紅。無残といふも余りあり。

へあゝこれ、惜しい代物だが、そう気が強けりやしよことがない。実太郎がよい手本だ。なんとさつはりと切り換へて、従ふ心はないか〳〵。

〳〵味をやるは〳〵。それ痛々だよ。ほんに子どもといふものは、聞き訳のないものではある。アハ、、、、、、。
〳〵それ〳〵、引くと指が落ちる。誓文立てか、ありがてへ〳〵。
〳〵たとへこのま、死ぬるとも、魂魄この土に留まつて、恨みを晴らさでおくべきか。

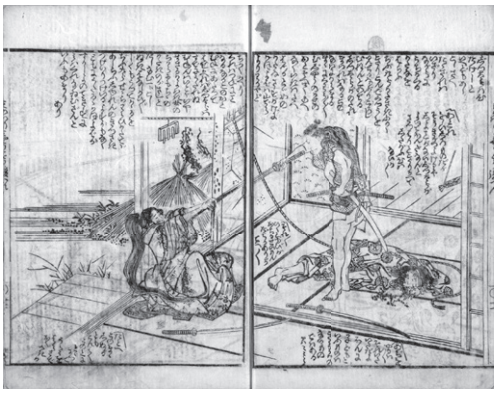

写真 14　26 ウ・27 オ

［27ウ28オ］
治部九郎は、あくまでに貌美葉をさいなみて、「さらば暇を取らせん」とて、はたと蹴返し乗掛かり、振り上ぐる切先ならで、柱に掛けたる守りより、赫奕と光明差し、実太郎が死骸を照らし給へば、怪しいかな、実太郎たちまち夢の覚めたるごとく、むつくと起きる足元軽く、落ちたる刀を取り上げて、治部九郎に打つてかゝれば、さすがの悪者仰天し、「わりや黄泉路返つ(た)な。こしやくな腕立てもの〳〵し」と、口には言へどうろたへまはり、是非なく血刀引提げて、はつし〳〵と打合ひしが、弥陀の利剣の鋭さは、たえて勝つべきやうもなく、たちまち刀をうち落とされ、怯むところを、実太郎が振り上ぐる太刀の下に、敵の首は落ちてけり。不思議といふも愚かなり。
〳〵いまぞ天運循環して、父の敵は打とめたり。さあ〳〵貌美葉殿、そなたの為にも親御の仇、立ち寄つて賽の目に切つて、恨みを晴らし給へ。
〳〵お前の身にもつゝがない。これは不思議な、嬉しや〳〵。
〳〵作者云、仏も人に私して、かの名号、かほどの奇特ありながら、知右衛門・順左衛門が横死を救はす、今実太郎・貌美葉のみを救ひ給ふにあらず。知右衛門・順左衛門が非命の死は、自らなせる災ひ也。こゝをもて逃れがたし。しかれども、信心の余慶、その子に及べり。見ん人疑ふ事なかれ。

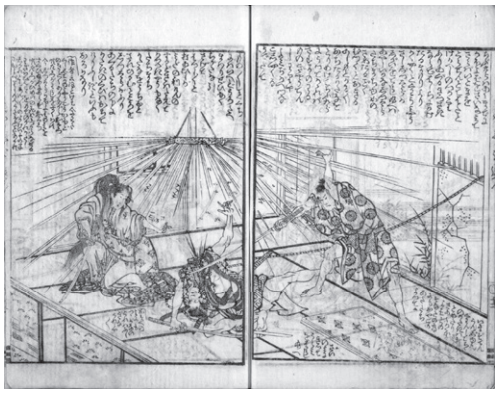

写真 15　27 ウ・28 オ

［28ウ29オ］

しかるに、なほも不思議なるは、実太郎・貌美葉が身に、一箇所の太刀傷もなく、あまつさへ、実太郎が足の傷さへ癒えて、あとなくなりしかば、両人いよ〳〵怪しみて、喜びに堪えず、親々の位牌の前に、敵の首を手向けつゝ、「まづ御真蹟に御礼申さん」とて、守袋をおし開けは、こはいかに、十字の名号、「帰命尽十方無礙光」といふ所に至り、「礙光」の二字すだ〳〵に裂け、半ばは消へてありしかば、「これまつたく、名号の身代りに立ち給ひしなり。こは尊とやありがたや」と、頓首百拝して、感涙止めかねたる折しも、歌野与太夫、伊豆国へ所用ありて、はからずも此所へ来かゝり、実太郎らが敵を打ちしていたらく、名号の奇特を見て、もろともに感激し、ついに実太郎・貌美葉を同道して、氏兼御夫婦へ、委細の事訳披露いたしぬ。

〳〵喜怒哀楽も仏の方便。世にも稀なる真筆の、奇特はこゝに身代りの名号と、末の世までも崇めなん。思へば思へば我々は、仏縁深き身の幸い。これにつけても信心堅固、この恩徳を忘るまじ。

忝や〳〵。

〳〵ありがたや尊や、南無阿弥陀仏〳〵。

〳〵珍しや藤坂氏、貴殿鎌倉を発足せられし次の日今、常盤井御前・氏兼朝臣の御病気平癒あつて、人々の悦び大方ならず。詳しうはゆる〳〵と物語らん。さて〳〵お手柄〳〵。

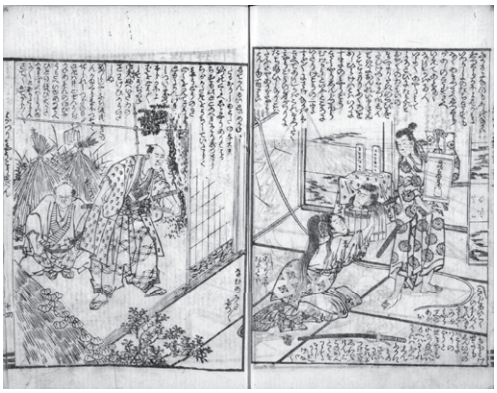

写真 16　28 ウ・29 オ

［29ウ30オ］

さる程に、実太郎・貌美葉は、与太夫に伴はれて鎌倉に至り、管領御夫婦に御目見得いたしけり。その時、常盤井御前、実太郎を御覧じて大に驚き給ひ、「恥かしや、我が身過ぎつる頃、物思ひに打臥したる夢に、鶴岡へ忍びて参り、祈願を込むるに、回国の修行者に教訓され、たちまち迷ひの雲霧晴れ、もつたいなくも我が君を疑ひ奉り、それとも知らぬ貌美葉を恨みし事を悔やみ、驚かし参らせし神仏に詫び申せしかは、君の御病気も平癒し、我が身も健やかになりぬ。これみな、かの修行者の恵みなり。そも神仏の枕に立ちて、教へ導き給ひしならんと、いとも尊く思ひしに、今実太郎とやらんを見れば、我が身夢に教訓されたる、修行者につゆ違はす。その方にも覚えありや。まことに怪しき事也」とのたまへば、実太郎も常盤井御前をつく〳〵と見上げつゝ、「げにそれがし鎌倉を発足する日、鶴岡へ通夜いたせしに、かやうかやうの事なんありし。その時の女中こそ、畏れながら、御顔ばせにつゆ違はざりし」と申せば、常盤井御前はいふもさら也、氏兼朝臣大に怪しみ給ひ、「汝が当所を発足せしといふ日より、わが夫婦平癒におもむきし事、かた〳〵そのいはれあり。これしかしながら、名号うの霊験にて、常盤井を済度し給へるものにして、実太郎が孝心・義心のいさほしなり」と賞美あつて、相模国三崎の庄を給はり、忝くも氏兼御夫婦仲人にて、貌美葉を実太郎へ妻合はせ給ひけり。

〈久々にての御目見得、御機嫌よいていを拝しまして、ありがたう存じ上げます。

〈古今稀なる者共じや。召し出して傍近う召し使はん。いよ〳〵忠勤を励み候へ。

〈身に余つたる御恩賞。与太夫殿、よろしくお受けを頼み上げます。

〈いつぞや、夢に教訓受けし回国は、実太郎にてありしよな。思へは〳〵恥づかしい。

〈みな何事も因縁づく。まことに不思議な事でござる。

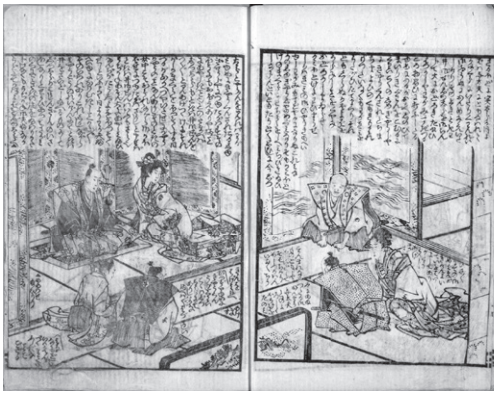

写真 17　29 ウ・30 オ

［30ウ］

かくて藤坂実太郎は、三崎の庄に屋敷を構へて、かの名号うを安置し、貌美葉と婚姻をとり結び、いよ〳〵信心堅固にして、父母の菩提を弔

ひ、又伊勢国宮川の酒屋角右衛門夫婦は、七才より召し使はれし恩あればとて、絶へず訪れし、我が身の昔を忘れぬ為にとて、屋敷のほとりを宮川と名付けぬ。これによつて角右衛門夫婦は、昔酷くせし事を後悔し、早速相模へ来たりて、実太郎夫婦に喜びを述べ、永く親族の思ひをなしぬ。されば、実太郎が子孫繁昌し、今も相州三崎の浦より半道ばかり子の方に当たつて、宮川村といふ山里の農家何がしが許に、かの身代りの名号ありし。かしこへ至りし人は、必ず参詣して、結縁を願ひ給へ。めでたし〳〵。

〈めでたし〳〵。

曲亭馬琴作

文化丁卯年季春稿了 戊辰年正月発行 板元通り油町 つる屋

写真 18　30 ウ

三　解題

曲亭馬琴は、自作において同種の趣向を多用し、自家薬籠中の物としてきた。例えば、親子の血が融合するか否かによって血縁関係を判別する「血合わせ」について、馬琴は読本・合巻を問わず利用するなかで、中国文献に趣向源を見出すことに成功した。[1] また、演劇的趣向として知られる「身替り」については、馬琴が如何にこの趣向を消化し、自身の読本作品内に機能させたかという問題について、かつて論じたことがある。[2] そこでは、身替りにおける「人情」描写や勧善懲悪の徹底といった、馬琴の小説理念に関わる問題に結論を収束させたため、悲劇的結末へと結びつかない神仏霊験譚としての身替りを充分に処理しきれずにいた。そこで、あらためて馬琴著作における神仏霊験譚としての身替りを確認したところ、読本よりもむしろ合巻に多く見られることがわかった。なかでも、本解題で紹介する『敵討身代利名号』は、この趣向を前面に押し出した作品として注目される。この神仏霊験譚としての身替りについて、詳細は拙稿「馬琴小説における「身替り」―神仏霊験譚をめぐって―」[3] を参照されたい。

『敵討身代利名号』（以下、『身代利名号』）は、文化五年に刊行された馬琴の短編合巻で、前編十五丁裏に「文化丁卯三月稿了 戊辰正月発行」とあることから、前年の三月には脱稿していたようである。水野稔「馬琴の短編合巻」[4] によれば、文化四、五年頃の馬琴合巻は、山東京伝と同様、背景や舞台を諸国の特異な地方色に求めるのが一つのゆき方で、本作執筆の動

機も、序文に「十字体代名号のごとき。見に相州宮川にあり。往に予。船を彼浦に歇て。親くこれを観たり」と記すように、寛政十二年の豆相旅行の際に宮川村の十字名号を実見したことに拠る。この点について、馬琴は『燕石雑志』巻之五上「伊豆の海」（文化七年刊）でも、

湊より十七八町ばかりゆけば、宮川と唱ふる村あり。この処は文治の年間、鎌倉右大将伊勢の宮川の農家をうつし給ひしかば、その名ありといふ。農夫某甲が家にて、親鸞上人の身がはり名号といふものをおがます。縁起あり。奇異なる事なり。(5)

と述べている。馬琴の言う「縁起」が、どういったものを指しているかは不明だが、「奇異なる事なり」とあるので、興味を惹いたものであったことは間違いない。なお、文化四、五年といえば、『椿説弓張月』に代表されるように、馬琴が異国を意識した読本著述をおこなっていた時期でもある。(6) 地方と異国という違いはあれど、江戸に住む馬琴の周辺地域への眼差しが、読本・合巻の双方から窺えるのは、興味深い現象である。

続いて本作における身替りについて見ていく。藤坂知右衛門の息子実太郎は、父を殺した蜘塚治部九郎を探す旅の途中、貌美葉（かほよば）（足利氏兼の腰元）の父である須藤順左衛門と出会い、敵の居場所を知る。実直な順左衛門は、二人を尋常に勝負させようとするが、逆に治部右衛門に殺される。貌美葉とともに治部右衛門を追って相州三崎まで来た実太郎は、蜘手（治部九郎の母）を討つが、彼女に噛まれた傷が破傷風となり、病床に臥す。そこに治部九郎があらわれ、病に弱る実太郎と貌美葉を殺す。ところが、「柱に掛けたる守りより、赫奕と光明差し、実太郎が死骸を照らし給へば、怪しいかな、実太郎たちまち夢の覚めたるごとく、むつくと起きる足元軽く」（二十七丁裏二十八丁表）とあるように、実太郎の所持していた法然上人の十字名号から光が発せられるや、二人はにわかに蘇生する。治部右衛門を討った後、二人が名号を拝むと、中の二字がずたずたに裂けており、名号が身替りに立ったことが判明する。

こはいかに、十字の名号、「帰命尽十方無礙光」といふ所に至り、「礙光」の二字すだ〳〵（ママ）に裂け、半（なか）ばは消へてありしかば、「これまつたく、名号の身代りに立ち給ひしなり。こは尊とやありがたや」と頓首百拝して…（二十八丁裏二十九丁表、傍線筆者）

十字名号とは「帰命尽十方無碍光如来」のことで、「南無阿弥陀仏」の六字名号と同様の意味を持つ。浄土真宗においては、本尊の向かって右脇に下げる掛軸、いわゆる「脇掛」として用いられるという。名号による身替りは、寺院の開帳を当て込んだ「開帳物」に多く見られる。例えば、宇治加賀掾の浄瑠璃「摩耶山開帳」（元禄六年三月初演）は、元禄六年三月から四月にかけて催された、摩耶山の十一面観音の開帳を当て込んだものである。(7) 本作は同じ加賀掾の浄瑠璃「七人比丘尼」（延宝九年刊）の改作とされ、大筋においては前作を踏襲している。名号による身替りが描かれるのは、遊女白菊の想い人である秋忠が、恋敵である土岐金吾によって殺される場面である。

御まもりみやうがうをづだ〳〵につきさきてあけのちしほにそめ

てありこは有がたや御みやうがう。我身がはりに立給ふか扨忝なやとおしいたゝき…（第三）[8]

馬琴が本作を実見したかは定かでないが、このような身替りを念頭に置いていたことは間違いないだろう。[9]

かくして敵討が果たされるのだが、十字名号が果たした役割は、身替りにとどまらない。六丁表、知右衛門の許を訪れた旅僧は、実子実太郎の存在を明かすが、同時に十字名号にまつわる因果を説き示す。それは次のようなものである。

その名号は、世に稀なる真筆じゃ。しかし、御身かの名号によつて災ひにあひ、又かの名号によつて幸ひあらん。これみな因果の道理なり。よく〳〵慎み給へ。（傍線筆者）

傍線で示した箇所に注目してほしい。これは、京伝・馬琴が読本著述においてしばしば用いた超越者の予言というもので、物語はその実現へと向かっていくのである。大高洋司氏の言を借りれば、「読本的枠組」に類するものと言えよう。事実、名号によって知右衛門・順左衛門は命を落とすも、貌美葉の病は癒え、身替りによる敵討が果たされるのである。これについては馬琴自身も、以下のように発言している。

仏も人に私して、かの名号、かほどの奇特ありながら、知右衛門・順左衛門が横死を救はす、今実太郎・貌美葉のみを救ひ給ふにあらず。知右衛門・順左衛門が非命の死は、自らなせる災ひ也。こゝをもて逃れがたし。しかれども、信心の余慶、その子に及べり。見ん人疑ふ事なかれ。（二十七丁裏二十八丁表）

もちろん、本作が読本ほどの構成力を有しているわけではないが、自身の読本著述における蓄積が、合巻という戯作にも波及していることは、彼の著述意識を探るうえで見逃せない現象である。

最後に、個別の趣向・典拠について見ていくこととするが、見返しおよび口絵については、注9播本解説、板坂則子「馬琴著作の稿本に見る「役者」と「役柄」」（『曲亭馬琴の世界』笠間書院、二〇一〇年）を参照されたい。

まず八丁裏九丁表で、養子縁組が破談となったことに憤る治部九郎の台詞「治部九郎は武士だぞよ」は、『仮名手本忠臣蔵』十段目の天河屋義平の台詞「天河屋義平は男でござるぞ」[10]を踏まえている。直後の「うぬよくちつとの間、嬉しい目をさせて遊びやあがつたな」も、七段目の大星由良之介の台詞「敵師直が犬と成て有事ない事よう内通ひろいだな」を意識している可能性が考えられるが、確証はない。続く九丁裏十丁表で、貌美葉が奏でる琴の音色「峰の松風音つれて」は、『和漢朗詠集』巻下「管弦」に「ことの音にみねのまつかせかよふらしいつれのをよりしらへそめけむ」（傍線筆者）[11]とあり、美しい琴の音色を喩えた表現として知られる。また、貌美葉の美しい歌声を喩えた「鶯の谷の戸渡るごとく」は、『拾遺集』巻第十六・雑春所収の道長の歌「谷の戸をとちや果ぬる鶯のまつに音せて春も過ぬる」（一〇六四番、傍線筆者）[12]を原拠とするが、「谷の戸」「鶯」をセットで用いる表現は数多くあり、直接の典拠は不明である。貌美葉が唄う「蕗といふも草の名、茗荷といふも草の名、富貴自在徳ありて、冥加

あらせ給へや」は、箏曲「菜蕗」の冒頭部の歌詞。「菜蕗」は八橋検校が作曲した組歌の代表曲で、『源氏物語』や『和漢朗詠集』などに取材した七歌から成る。十一丁裏十二丁表、常盤井御前の心火が貌美葉に憑依するや、物狂いとなって男たちを投げ飛ばす趣向は、『椿説弓張月』続編・第四十回（文化七年刊）で、「一団の燐火」（白縫の魂）が憑依した寧王女が、たちまち「悪少年」たちを退治するという展開に通ずる。[13]

後編に入り、十六丁裏十七丁表には「二十歳余りの美女」（貌美葉）が鶴岡八幡宮の社前で丑の時参りをする場面がある。丑の時参りといえば、嫉妬に狂った女が恋敵を呪詛する趣向として知られるが、その舞台を鶴岡八幡宮とするものとしては、鶴屋南北の歌舞伎『隅田川花御所染』（文化十一年・江戸中村座初演）が知られる。十九丁裏二十丁表で、治部九郎たちが移り住む「一二の橋のほとり」を深草の近くとしているが、これについては、『燕石雑志』巻之二「一二の橋」にも「按ずるに一二の橋は、山城国深草に有り」との記述が見られる。二十二丁裏二十三丁表には「曲亭新作の読本外題を知る歌」が載る。「読本」を標榜してはいるが、『敵討児手柏』や『小鍋丸手石入船』などの合巻も混在している。このことについて、高木元「書肆・貸本屋の役割」（『岩波講座日本文学史』第十巻、岩波書店、一九九六年）は、読本と草双紙の読者層が重なっていたことが前提にあると指摘している。このほかにも、多くの趣向が用いられていると思われるが、筆者の浅学ゆえ明らかにしえなかった。識者のご示教を賜われば幸いである。

注

（1）拙稿「読本・合巻における趣向の往還―「血合わせ」を手がかりに―」（『馬琴読本の様式』清文堂出版、二〇一五年）。なお、本趣向については続稿を予定している。

（2）拙稿「「身替り」の機能―〈巷談もの〉を中心に―」（同右）。

（3）『読本研究新集』第十二集（二〇二一年）。

（4）水野稔『江戸小説論叢』（中央公論社、一九七四年）。

（5）架蔵本による。適宜、句読点を付した。

（6）佐藤悟「名主改の創始―ロシア船侵攻の文学に与えた影響について―」（『読本研究新集』第三集、翰林書房、二〇一四年）、大屋多詠子「馬琴と近松」「京伝・馬琴読本における辺境」（『馬琴と演劇』花鳥社、二〇一九年）など。

（7）摩耶山の開帳を当て込んだものとしては、ほかに歌舞伎「仏母摩耶山開帳」（近松門左衛門作、元禄六年三月・京都都万太夫座上演）、同名題の歌舞伎（作者不明、元禄六年春・大坂岩井半四郎座上演）がある。浄瑠璃における身替りについては、原道生「「身替り」劇をめぐっての試論―逆説的な「生」の意義づけ―」（『古典にみる日本人の生と死　いのちへの旅』笠間書院、二〇一三年）に詳しい。

（8）古浄瑠璃正本集刊行会編『古浄瑠璃正本集加賀掾編　第二』（大学堂書店、一九九〇年）。

（9）『兎園小説』第一集所収の「百姓幸助身代り如来の事」（文政七年十一月成稿）には、「阿弥陀如来の画像」が百姓幸助の身替りとなり、馬琴が「文化中」にそれを実見したことが記されている（播本眞一「敵討身代利名号」『早稲田大学所蔵合巻集覧　上』青裳堂書店、二〇一二年）。「文化中」が

具体的にどの時期を指すのかは不明であるものの、馬琴が身替りの趣向を読本・合巻で多用していた文化年間の出来事であるため、彼自身、興味を惹いたものであっただろう。『兎園小説』の引用は、天理大学附属天理図書館所蔵の馬琴自筆本（西荘文庫旧蔵本、914.6 -イ41）による。

(10) 鳥越文蔵ほか校注・訳『新編日本古典文学全集77 浄瑠璃集』（小学館、二〇〇二年）。

(11) 国文学研究資料館蔵本（天明二年刊、サ1-12-1～2）。引用は新日本古典籍総合データベースによる。

(12) 国文学研究資料館蔵本（寛政十一年刊、ラ6-18-3）。同右。

(13) 後藤丹治校注『日本古典文学大系61 椿説弓張月 下』（岩波書店、一九六二年）。

〔付記〕

資料の掲載を許可していただいた、蓬左文庫に深謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費（若手研究 課題番号：18K12301）における成果の一部である。

Abstract

Katakiuchi-Migawari-Myogo:
A Review of the Subject and Transliteration（Part Ⅱ）

Kazunori NAKAO

A continuation of my previous study in *Memoirs of Nara University No.49*, this paper is a transliteration of *Katakiuchi-Migawari-Myogo*, first published in 1808, with brief commentary added.

This work is a tale of vengeance on the theme of *Migawari*（Scapegoats）with the ten-letter *Myogo*（Buddha's name）written by Shinran, and is positioned as a tale of the miraculous efficacy of the gods and Buddha. The ten-letter *Myogo* of this work also has a function similar to the so-called *Yomihon-Teki-Wakugumi*（framework of the *Yomihon* novels）of prophecy by transcendents and the realization thereof. It is an interesting phenomenon, as it can be seen that the accumulation of Bakin's *Yomihon* writing has spread to the *Gokan*. For details, please refer to my manuscript "*Migawari* in Bakin's novels over the tale of the miraculous efficacy of the gods and Buddha"（*New Yomihon Research* Vol.12, 2021）.

Keywords: Kyokutei Bakin（1767-1848）, *Gokan*（one type of illustrated novel）, drama, *Migawari*（Scapegoats）